

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 115: 105-145
Issue date	1906-03-08
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5937">http://hdl.handle.net/2298/5937</a>
Right	

# 雜報

## 新春の辭

悠久の歲月、無涯の天地、人間一度出現せしより、新春には、瑞雲希望の色に廻り、佳氣光榮の句に浮ぶとかや、歲月若し心あらば、天地若し靈あらば、定めし平凡の讃辭、將た我執の批判と喝破し給ふなるべし。然るに何の幸ぞ、天地歲月の精靈東海の富嶽に降り給ふと見しが、徐ろに五千萬同胞に「自覺」の華冠を授け宣はく、復活の新春汝等にあり、眞の光榮希望に加ふるに崇嚴活躍の發展を以てす、吾が第一の寵兒たるもの汝等の裡にありと。建國二千五百六十六年、日本大帝國、大和大民族は茲に復活の新春を得て、天地歲月第一の寵兒となる、希望、光榮、崇嚴、活躍、以て萬載に誇るも、以て

東西に叫ぶも、決して平凡の讃辭にあらず、我執の批判にあらざる也。

天地是れより渾沌たらず、歲月是れより寂寥なけむ、吾人堂々の歩武に對して、依然平凡我執の世界萬衆は、宜しく大悟一番して可なり、吾人今茲に復活の新春に際し、巍然として此の「自覺」の華冠を戴くを祝す。

## 東京通信

明濱生

謹啓仕候、新春の吉慶目出度申納候、龍南の諸兄皆々御揃御清康御超歳遊ばされ候事と存し奉り候。降りて小生も御蔭を以て相變らず頑として健に、何時の間にやら碌々として最早人生の央に相達し申候間耻がしながら何卒御放念下されたく願ひ奉り候、さて東京通信と金看板を掲げ申候へども、決して御用新聞の門外漢の眞似を致すにも候はず、また先輩諸兄の如く、未だ

講義を聴く事數回ならざるを、堂々と敎授諸先生の品騰を申し上ぐる如き膽略と面皮とは、あ

やにく小生持合せこれなく、さればとて魚河岸にわでんの立食も度重なざれば、所謂江戸生粹の御消息も申上げかね候へども、例之電信柱などの直近傍に立ち候へば、柱が果して垂直やらゆがんで居るやら分り申さす候へども、少しく離れてこれを望み候へば、一度一分の傾斜を見免さる如く、吉羊の秋涙ながらに龍南の古巢を立ちいで、羽ばたき覺束なく東の空に飛ひ候までは、ひたすらに母校なづかしく戀しくて、其缺點などゝは愚か、天下此處より優れたる處なしと思ひ込み居り候ひしも、段々と寒い冷たい世間の風に吹きまされて候へば、自から我母校の足らざる處や、望ましく思ふ處も出來いたし候故、相變らざるの惡口を毒筆にてこねまわし、御無沙汰詫の第一信にあらう事が、少々御耳の痛い事申し上ぐべく候、蓋し御嬉しい御話

し申上ぐる人は都門にある同窓其人に乏しからずと存候へば也。

第一が例の學校の禁酒條例にて候、此間或法政の研究會の席上、五高の禁酒宣誓の談にわよび候處、衆口殆一致して、法律上無効なるべきを申候、こゝに始なる氣障な字を挿入致し候は、坐中の一人營造物に關する規則に據りてこれに打入するものは其所有主の要求する所に従ふべきを主張致し候へども、學校は一般の造營物なるや、校長は所有者なるや、此規則を以て律せは其造營物以外に於て飲酒するものに對する處分如何の難問紛々として生じ候爲其僅かの一人も遂に兜をぬいで降り申候。小生は熊本にある時代より多少の疑惑を抱き居候ひしも、酒も餘り嗜み申さねば、規則の有無には敢て利害の關係もなく、また神聖なる學校の規則に對し三百的に法律を云爲すにも如何と存し箴默を守り申候へども、眞理は何處までも迂ぐべきものに候

はねば、一應御參考の爲申上くるばかりにて候。唯これを法律的有効ならしむるには官報にて高等學校の生徒を募集するに當り、廣告の末尾の處にても各高等學校に入校後に要する特別の注意として公告致すかた、頗る穩當ならんかと存せられ候。然しかく申さばとて龍南の諸兄か一旦男らしく誓約せしに關せず、無効を主張して、飲酒さるゝは固く御無用の儀と存じ候。

次が圖書館の書籍分類の方法の改正にて候、高等學校の分類は随分乱暴にて候、否頗無學文旨的の區分も相見に申候。今碩學スペンサーを地下に起して五高につれきたり貴殿の綜合哲學を一舉にして探し出されよと注文しても、とても六ヶしかるべきかと存せられ候併し多數の書籍中には就れに屬するものなるや不明のもの多かるへきは勿論、精密正確に區別せんとするには、多數の係員を要する事と思はれ候へは、其區別の曖昧なるものは幾ヶ所にも牌子を出したか

は好都合かと存せられ候。例之寫眞に關する著書なりせば、科學中の光學にも出し應用化學にも出し、美術中にも列ね、娛樂中かも挿みなき候はゞ、不都合少かるべく、實際にまた同じく寫眞と題する書中にも、ケルビン郷の著の如きは、全く理論にして光學の一書たるバルトンの著は、娛樂に屬し候如く、一にこれを判別せんとするには、一つにまた専門家を待たさるべからざる面倒の儀と存し候。何しろ速に改めざれば、獨り職員生徒閲覧の不便のみならず、圖書館は一校一國の書齋にて候へは、外に對しては耻辱を暴露するに等しきかとも存せられ候。

奈須川先生には追々途上にて御目にかゝり申候が。今は明治大學の講師をして居られ候由、明治の學生は大に悦び居申候。それに引かへ學校に禁酒の修行に入學せざる所謂學術研鑽の爲に來りる龍南の諸兄中には、御失望の御方もこれあるべくと存し候、今色々と申候はこれ死兒の

齡に數ふる愚に過ぎず候へども、返／＼惜しき事致し候。先生に多數の外國文學者の欠点たる自國の文學に餘程の注意を御拂ひになりしと相見、英語其物は我輩批評の方らくこれなく候へども、其譯に到りては獲易からざるものと信じ候。スカーレットレッツターの講義の際に、或人か奈須川先生もなく、英語もなく、書物もなく、ホーソン其人が北音雜りの流暢なる日本語を以て物語るが如く思はると申し候は、決して誣言に非すと存し候。講義筆記中の「非」字の通計を二にて控除し、割り切るれば肯定、切れぬは否定の文章と計算する面倒もなく、斷頭臺に昇る心地にて、教場の入り口に念佛眼に涙、わろ／＼聲にて譯をつける迷惑もなく、面白く樂しき授業にて候ひしが、諸君の爲に轉た殘念に存し申候、併し今文科大學の科外の齋藤氏囑託を解かれ候故、其後釜は先生ならむとの噂高く候が、其風評の實現せん事を切望する次第に御

坐候。

去年の春にて候ひしが、何とか申さるゝ獨法の高襟の御方、何とか婦人會にて未熟のバイオリンを矢鱈御覽に御入れになり候ひし事ありしが、あの様な事は以後差扣へられ候方御得策かと存じ候。と申すは一體熊襲と申す人種は、犬より進化せる人類と相見へ非常に鋭敏なる聽覺を具ふる種屬にて候。日本に於て古來音韻聲律に關する著書は大多數は九州人のものせるものに、四角四面の儒者中にも隨分奇曲を解せられし人も多く、また現今に於ても東京に於て第一流と唱せらるゝ音樂家は殆皆九州の出身にて候。即九州人が生れながらにして聲律に明なる證據にて候、それ故兩乞拍子より外知らぬ江州あたりより飛んで出でグキトグキーいはせられたれ候ても誰一人驚くものはこれなく、唯其時人々の眼を圓にして居りしは、バイオリン故に非ずして、貴殿の襟の高きと、頭の鬢付の光澤に

驚きたりしものにて候。

當地に來て尤驚きしは村演説に似し法螺の吹具合や、拇指の立ち具合の坪井博士と、武藤先生のそれに一致せると。も一つは柳樽オット失敬、柳村先生が世界誰でも知つてゐる事を、我一人知つたかの如く云はれる鹽梅や、讀んだ事もない参考書を臚列せらるゝ容態の、白村先生のそれに丸拔きなる事に御坐候、修養組の諸兄、御起居如何。或獨逸の先生に修養組の意味を聞かれ、修養とは化<sup>フエルス</sup>石<sup>シュ</sup>する事也と答へ候が、諸君實に曆を逆に讀むで行く人にて候。寒氣厳しく大學病院大繁昌にて候、皆々邦家のため御自愛專一に禱り奉り候。先は年頭の御祝儀迄書餘後便にて縷々申述ふべく候。惡口多罪恐惶百拜

一月初九日

## 劍術部秋期大演武會記事

北海の逆浪靜まり。三軍の將士恩賞に飽き。天

下之より鼓腹せんとす。然れども武邊の事一日も忽諸に付す可からず、治に居て乱を忘れず。勝て益兜の緒を緊むるは。武者の心得なり。腕鳴り肉躍るの秋天に際し。十一月十一日を期し濟美館に於て。例により大演武會は舉行せられぬ。いで。是より勝負に就て。一々禿筆もて剪劣なる短評を試みん。妄言多謝。

川下—石橋 互に睨み合ヒツ、容易に掛らす。蓋全軍。吉凶放度の手合に卜せらるゝを慮ればなり。紅白兩軍の勢を望めば。旌旗煙に翻り。龍蛇雲に騰り。甲冑皇大に輝き。星斗地に列る。かくて兩雄は徐々馬を歩ませ。打物の鞘はつせば。兩陣の兵衆あれ見よ今日の手合をと。手に汗握り。片唾呑んで。勝負如何にと俟つ。兩雄につこと打笑ひ。弓手に懸違ひ。馬手に開合せ。川下礮と打てば。石橋發と請流す。石橋開てひしと切れば。川下打側む。川下の打下す。胴切に石橋重傷を負ひ。屈せず切返せば。川下

二度胴を傷いて斃る。

沼池―石橋 戦友の仇思知れと。腦天碎けよと打下ぐ。石橋失策たりと打返す胴を。はつして

沼池の小手。

沼池―藤本有 新手の武者振天晴！敵に一分の透間を與へず續け様に面を打つ。沼池眼眩み血を吐いて死す。

安東―藤本 安東身の丈高く斯道の熱心家なり。されど此日の運や悪かりけん。將たまた。藤本の技勝れたるか。面二度打たれて退く。

上村―藤本 上村は輕んず可き敵にあらず。無造作の打込。却て油斷出來ず。藤本優腕にも既に二人の剛敵を破り。今又上村の勇猛に會す。面と胴とを輪して退く。

上村―貝塚 柔道界の鬼將軍貝塚。身に黒皮威鎧着し。十八貫目の鉄棒輕ける打振り、摩利支天と雖も與ふべくも見へず。上村太刀鏢本より打折られ。帶添拔がんとせしも。腦天したるか

に喰はされ。九竅血を吐いで死す。

廣瀬―貝塚 廣瀬拙き者ならねど。貝塚の棒。天摩破句の力なくては。之も恐乎。微塵になつて死す。

浦本―貝塚 浦本の遠攻に。客氣の貝塚氣をいらち。一氣に勝敗を決せんと。打込む太刀をかひくふり、引組み様内兜の吹通の外れ見掛け刺さんとす。浦本組敷れては一大事と。隙得て脱れ直り。小手再度まで打つ。流石の貝塚も撃と響を爲して倒る。

浦本―武富 天晴剛者や。我杜仕留めんど。青眼に身構。じり／＼と進む。寸分の透なく手利とは見ねたり。忽ち浦本の胴は一の字に紅に染む。浦本屈せず小手打下ぐ。武富何條ひるむべき。又胴を斬て返す。

山下―武富 山下屈強の兵なり。武富の正々の陣も山下の詭術に色めき立ちぬ。最初武富特技の朋入りしも。山下の飛込み面は武富を斃しぬ

山下―池田 山下機敏にも。池田が陣を整兼ねるを見て。猶豫あらせす付け入り様。胴と面は。池田の爲に惜む。

山下―吉光 吉光の奇兵を用うる山下に劣らず。悠々たる態度春の園を行くが如し。無造作加減敵を惑はすに足る。山下亦持つかゝらず。霹靂一聲吉光のすり上げ胴。序で身も亦面は大傷を被る。今や兩人共に傷き。阿修羅の如く狂ふて切結ぶ。吉光焦つて切込む小手に。哀れ山下嵐に散り失せぬ。

前田―吉光 前田軀幹大。技亦適ふ。喚いて吉光の小手切れば。吉光例の如く驚がす。上段より面を打つと再度。

生田―吉光 生田疲勞の吉光何かあらんと。直入面を打ち下げ。吉光のたちろく所を。足をからみて寄り倒さんとす。危難に臨みて自若たるは吉光の特色。體をひねりて胴をすくう。互に太刀把り直し。吉光上段。生田睜眼。睥みて中

々掛らず。透を得て生田の切込む面を。はつして吉光の得意の面に、敢なく生田の森の梅花と散りぬ。

因に吉光君の上段は鋒先余り下り過る故。活氣なく見へ。又實際多少遅からん。吉坂―吉光 紅軍相續で勇士を討たせ。氣を失つて見ゆ。吉坂非力なれども技は丹練せり。紅軍の衆皆望を囑す。吉光容易ならざるを知り。元氣を復せんが爲め上段を取り。敵の策戦を改めんとする閑と。息を休めんとす。吉坂之に乗らず却で急攻す。吉光身全鉄ならねば已に數ヶ處の傷を被り。漸次受太刀に變ず。最初小手取りしも。敵の胴と面とに往生す。

吉坂―辻 辻は柔道界に知られたる新進氣鋭の兵なり。劍に於てと心得あり。面と小手とに吉坂戦鬪力を夫ふ。

田島―辻 田島面を打ち。辻小手に入りしも。再田島の面に敗亡す。



田島―稗方 共に骨格大なり。稗方は昔鍛つた腕に自惚あり。稗方。熊本一流の打込面は美事。田島の怒りて打返す剛刀を受け流して。小手を丁と切る。

福田―稗方 福田背丈延び。風良已に輕快を示す。されば即ち聲鮮かに叫んで。打出す胴は美事。稗方何小癩なりと面を打ては。福田再刀を取り直して面切り戻す。

福田―東 東數度の經驗あれば巧者なり。敵の馬首を牽き直す間もあらせす小手を打つ。福田少しも凝議せず。打返す。東のひるむ所を疊かけて又面は早業！

福田―古川 紅軍福田の武勇に色を直す。古川は久く濟美館に見へさりしも。流石は水涸れず。福田の新參者何かあらんと。馬懸け食せ切り結ぶ。福田氣逸れども放手は老巧なり。福田の劍影を懸けつゝ小手に入り。弱る所を面をあびせて頸搔き落す。

喜多―古川 古川馬一足颯と懸け寄せ胴を拂ふ。喜多心得たりと小手を打つ。古川太刀の柄取り延べて。面を斜る禁割にす。

牧―古川 牧は膂力あり。技あり。而も熱心衆に絶す。古川の小手もたまらず切り落し。續て區中音高く拂斬る。

牧―鹽津 鹽津巧し虛劍を用ゆ。眞向より打下す太刀悔るべからず。牧の満々たる野心は鹽津の造作なき待遇に投合するを得ず。氣丈の牧。名を惜む鹽津。茲を前途と戦へど。勝負果つべくも見へず。牧焦つて號叫一聲胴を拂へば。鹽津跳上つて面を打つ。牧一足退つて再胴を拂へば。鹽津すかして遂に面を取る。

久布白―鹽津 天晴大剛の者や。牧を討取りし程の手並左こそ猛ならんと。驅け寄り様石疊に切り付く。鹽津こはしたりと颯と開き退き。亘り合ふ。久布白離れては不利なりと。短兵急に付入り。再び面を打つ。

久布白―深浦 憎き敵の振舞哉と。跳懸り様面を斬る。久布白失策たりと胴を打て返す。深浦ひるまず離れ乍ら小手うつ。

平島―深浦 悠然蹂がす。徐かに歩み出てたるは平島なり。一見兵氣立たざるが如きも。緩慢と見ゆる間に敵の喉を扼するは其得意とする所なり。されば小手打に妙を極む。觀衆如何にと埃つ間に。深浦は既に雙手紅に染んで退さつゝあり。

平島―福田 福田奇策に富む。平島の早業なしと雖も氣隆なれば往々機功を奏す。されど此日の運や盡たりけん。頓に氣衰へ。體弱り。打物の冴出です。面二處迄あびせられ。眼眩みて斃る。

平島―岡林 勝に乗せし平島。氣次第に充滿し。體益輕快。岡林の短兵急攻に堪へ。あはや討るゝかと思れば。丁と拔り。左右前後に開で敵の鋒銛を避け。漸く疲るゝを見すまし。胴二本

仕て除けたるは天晴の業なりけり。

平島―上野 此敵仆さずば味方に取りて大事なりと。太刀風輕く切り懸る。察したりと。平島蹂がす胴を拂ふ。殘念一聲上野得意の小手。弱る所を面を溶せて。白軍の愁を拂ふ。

野口―上野 野口業丈夫なり。上野の小手先づ入りしも。數合の後面にて野口の勝。

野口―布田 布田小兵なれども體輕く。打込面は玄妙先づ互に小手を交換し。序で布田の面見事

園田―布田 園田の元氣昔に異らず。先づ小手の應酬に。はつと一息。此處一大事と。隙を覗ふ中倏忽布田の諸手付は。園田後へたじろく。山口―布田 布田の飛込小手は例の如く入りぬ。山口猪小才なりと胴を拂ふ。布田ひるまず飛込處を。再小手丁と斬り落す。

山口―藤本 藤本了は濟々覺武者振流の勇手なり。身つくろい一番。やと右手切り落す。山口

左手を延べて片手打る胴拂へは。藤本再左手をも切落す。

渡邊―藤本 渡邊は手先の利く人なり。早速小手。藤本亦すかさず返す。互に片手を以て戦ひしが。遂に渡邊左手をも失て退く。

浦川―藤本 瓊州一の剛名。浦川。泰山の搖ぐが如く堂々と迫る。藤本威にや畏れけん。或は既に二人の強敵を仆し償へりと思ひけん。裏の氣勢に似ず。ためく面と突とに敗亡す。

浦川―鍋倉 鍋倉は都城の人。往年武者修業して九州の諸道場を荒せし剛者。飛込み様胴を撃ち。颯と又離れて。數合の後首を揚ぐ。

田島―鍋倉 田島老て益壯なり。豫て稽古せざるも。勝負毎に勝を制するは。既に技熟すればなり。小手を取面を打たれ面を返して勝。

田島―大淵 飛込様體を踞めて撃つ胴は。田島の御箱なり。大淵しまつたりと。小手ゑいと斬る。再飛込む田嶋の胴は玄妙！。

田嶋―野中 野中片手拂に胴を撃つ。田嶋したるか小手を切る。再び田嶋の飛込胴は。天狗の業？。

田嶋―上田 此敵仕留めて後代に名を残さんと。躍掛りて面を割らんとす。田島させじと。小手を切る。上田屈せず。二回迄面を截りて漸く斃す。

上田―坂本 坂本は人身是氣。上田は奥妙の業。而も二人生地を同ふし。熱心に於て一致す。坂本先喚て切込めば。面は直に交はされたり。豫て互に手並は知れ。長短互暗す故に先づ掛る者常に敗る。然れども是れ坂本の永く堪ゆる所にあらず。坂本奔然身を躍らして打込めば。

上田微塵かと思ひきや。騒かず受流して横面は。賢くやつたり。

久保―上田 久保は諸手上段の名人頂邊より打下す太刀は。面となく。胴となく。敵者の苦む所。上田敵の連發に度を失ひ。腹二度迄續け撃

たれて戰死す。

久保―小泉 小泉體巖の如く而も其間より微妙の業を出す。先づ久保胴を傷き。暫時揉合つて後。再び胴を傷く。こたびは淺かりしも。裏の重傷に弱りしかば。墓なく斃る。

黒田―小泉 黒田此日の武者振殊に目立て見ゆ。総て黒に裝束し。武勳の程も思ひやらる。然るに出鼻忽ち額を破られ。面のみ紅に染む。黒田怒氣衝天。阿修羅王の荒れたる如く發刺と面を打返す。乃ち互に逐つ返しつ勝負決せず。觀衆手に汗を握り。酔へるか如く鳴を靜めて見物す。只時に漏るゝ咳聲。夜陰を被るに似たり。黒田の運や強かりけん。三尺八寸の大太刀は。電の如く鋭く。小泉の胴に喰込みぬ。

黒田―加藤 山岡流の達人加藤。太刀莖短かに握り。怒濤の如く押掛る。黒田飛鳥の如く之を避け。加藤の餘勢を利用して胴を拂ふ。加藤怒りて。汝豎子と。剛刀を打舞し。切ては突き。

突ては切り。夜嵐さはる小松原。絶へて久敷音なはねど。昔ながらの濃緑。加藤の技術中々衰へず。黒田危地に陥る。されど黒田物具よくして猶疵かず。黒田飽迄此日の運や強かりけん。又も美事な胴に。松々枝颯と散る。

黒田―福山 黒田三面六臂を有するも。飛將軍福山の電撃の網を税るゝは難からん。宜なり。先づ小手を丁と切る。輕し。再るいと突く。美事なり。黒田已に剛敵二人を倒し。眼中敵なく。而も自己を認めず。身は是れ霞を喰ひ。氣を吞む仙者の通力を得たるに似て。五雲に乘し。風の間に――浮動するが如くなり。自己の活動を意識せざるも。動作事宜に叶ひ。本一本要領を得。攻を知るも。守を知らず。故に敵をして乗するの機なく。度を失せしむ。凡そ勝の秘訣は攻勢にあり。攻むるものは氣隆に。心一なり。防者は心疑懼し。横念蕩出す。統一を以て散慢を打つ。勝たずと云ふことなし。黒田傷を被

ると雖も。覺らざるなり。福山技神を極むと雖も。氣黒田に制せらる。面を打たれ敗亡せることを遺憾なれ。

黒田—鈴木 黒田馬傷き。兜破れ。血泉の如し。而も氣振ひ今一戦にて敵の牙壘は掌中のものたり。然るに黒田如何に思ひけん。我が上に猶足立將軍のましますあり。我一人にて功を壇にせんも氣の毒なり。敵將の首級は大將軍に譲らんと。面二度打たせて退く。物のあわれを知れる武士哉と賞讃へられける。

足立—鈴木 足立將軍馬悠々進め給ふ。二三合して胴を拂ひ給ふ。實に美事なり。鈴木しごろになりて見へけるが。かくては叶はじと。大上段に構へて呼吸を休め。透間を覗ふ。足立焦つて衝かんとせしが。面を打下さる。再び鈴木太刀を眞白に翳して打下せしが。運や強かりけん。美事。味方箴を叩いて勝鬨を揚ぐ。

演武終りて賞品授與あり。兩軍の士講和成り茶

菓を盛り。歡呼を盡す。夕陽没する前散會す

因に優勝者進級者編入者及赤紐受領者左の如し

優勝者 田島、黒田、平嶋、吉光、  
進級者

二級甲、黒田、大淵、久保、川田、  
二級乙、田嶋、  
上田、  
三級甲、倉岡、上野、中山、深浦、  
三級乙、福田、古川、神方、山内、  
岡林、木多、三角、  
四級甲、保々、伊藤、東、  
編入者

四級乙、田坂、沼池、川下、石橋、  
廣瀨、池田、安東、  
四級甲、藤本、貝塚、上村、武富、  
吉光、宗像、浦本、西村、  
辻、岡山、前田、生田、  
古庄、吉坂、久布白、田島、  
福田、  
牧、野口、藤本了、渡邊、  
三級乙、鍋倉、

# 明治三十九年度剣術部 寒稽古記事

一月十五日より二月四日まで。向ふ三週間の寒稽古は舉行せられた、時間は午前五時より同七時迄、五時といへば、まだ、余程闇い、温い夜具を排して、情ない程冷ひ稽古着一枚になるばかりで、已に十分寒稽古になる、況して寒天研鎌の如き月を仰ぎ、霜柱踏みしだき、凍れる風を浴び、濟美館に驅け付け、叫び喚んで演武するとは、なまなか薄志弱行の徒では出来ることではない、殊に今年は例年に比し、數等。寒氣激しかつた爲、出席者に取りては苦痛であつたらうが、寒稽古の寒稽古たる所以のものは、無遺憾果されたと思ふ、出席者は總數。師範、助手、外來者、共に六十六人、内、皆勤者は三十三人。其内三年皆勤者か四人あつた。出席者の數は昨年に劣つてゐるが。皆勤者の出席比率は前代未開である。二月十日結了の鏡開があつた。

龍南會頭は見へなかつたが。兩部長か出席された。會頭代理として。武藤柔道部長の一場の御辞があつて。數組の演武あり。次に証書授與。終りに雜煮善哉の誥込み。一時に始まり四時散會した。

三年皆勤者左の如し

野中松一、種田龍、田代榮重、宮岡秀二。

進級者

二級甲、石井、山口、上田、田島丈、

山崎、園田。

二級乙、赤峰、長瀬、種田、鍋倉、

大淵三、深浦。

三級甲、三隅、田代、除野。

三級乙、藤本有、上村、宗像、宮岡、

吉坂、前田、星、

四級甲、田坂、石橋、岡村、安東、

齊木。

四級乙、梅崎、高田、神保、山下、

富山、立川、小川、徳田。

赤紐受領者。

赤峰、長賴、種田、大淵、  
深浦、鍋倉。

## 弓術部消息

夜を逐ふて月光、明を多くし、朝毎に林樹、聲稀なる頃となれば、例の小松原の射場に人足少なく、霜草獨り枯れんとして虫の思苦しき、秋風空しく梢に鳴つて鳥、栖むことを恐るゝ計り、卷藁は朽ちて鼠の荒す處となり、安土の地は小犬の遊び所となるが例なるを、今年は幸にして左る憂目をも見ず、武者窓、物置の戸、さては羽目板、一步進めて土地に迄、先生の手帖の様な縦横の線を引きて、某何中、それがし何本、と点取表の記されざるは無く、矢返へしの板には、生々しき矢尻の跡を斷つことなき迄、人々の熱心なる往き來に愛でゝか、未だ見し事も無き秋草の、此年は彼所の芝原に咲き乱れたる床しさ。

十月の大會後、射納式迄に例會を開けること五回、出席者毎會通じて大凡十三名、部員全數に比しては決して多しといふべきにあらず、日頃の練習に怠りなき人々は、花々しく當日に打て出で、秘藏の手並を見物せしめては如何にや、尤も例會の撰定が、副科の時間などに差支有りしは、撰びたる者の罪なれど、之も副科の副科と思ふて勉強し玉ふこそ宜けれと思はる。

射納式 十一月廿六日、正午より行ふ、會者卅二名、廣からぬ場所の此日は分けて狭きを覺わたるは嬉敷限り也、金的は第一番の波江、他人の心配に頓着せず、二本目にて見事申てたるは御手柄なりしが、由來金的は崇多しとの教を守らぬ天罰として、点取りの時、如何様の身の上と成るかも、神ならぬ身の知らざりしとは笑止々々、射割は松嶋割つて退けたり、射割の崇はごんなもんか知らず、小的十射の点取にては、先づ一番に波江天罰を受けて無中、大日方

の強情者も、天罰の側杖を食つて之も夢中とは氣の毒千萬、さるにても、何も罪なき長瀬、高取、勝田、古閑、徳富、魚住、なんどの名人が、同じく一点も得ざりしに至つては、實に神も佛も無き世なりけりと申すの他なし、前世の功德どの位なりしか、浦川の四点是當日の晴業、但し御當人は一向功德を積んだ覺無しと謂へり、隱徳者なる哉。

川浪、傍若無人の口を叩いて、然も三点を得たるに兆すれば、押の強きも亦一徳と見わたり、次で小野の同點、但し之は乙矢のみにて中てなれば、餘り人の眼に立たず、自分獨りホク／＼笑みをするなど、随分たちの宜く無い方なるべし、東師範の同點、近頃若返つたと仰言ありしは恐縮の至、武田の二點は實際拾ひ物也、中嶋の同點に至つては奇々怪々、二本を合せて漸く一本振りと云なが如きはしみつたれも甚し、松田の二點も御多分に漏れず、然し沈着なる射方

は賛め置く可し、松嶋、佐藤、色川、共に一點、一點の邪氣無く一點の慢心無く、而して一點を得たりと謂へば大に感服する所なれども、人の心は他から分かる者に非らず、鼻臭の多少荒かりし逕跡ありと聞けば、吾亦一點の涙無き能はざる也、岡村、之も一點を得たれど、最後の競争試験に落第せしが如きは言語同斷なり、人に後るを善と稱すと、されども之は偽善の批を免かれず、何となれば善は急げと申す事あり。當日の受賞者如左、

一等浦川、二等川浪、三等小野、四等東師範、  
 五等武田、六等中島、七等松田、八等松島、  
 九等佐藤、十等色川、  
 金的波江、射割松島、

餘興に源平を行ふ、都合三回の合戦にて、白軍遂に勝利、其得點は八に對するの五、當日生駒師範來場なかりし爲め、其儘となりたる昇級者及編入者の發表は、其後兩師範の免許



を得て左の如く決定せり。

浦川精二(三級へ)、

吉富義助、安中清治郎、松田秀雄、

勝田考興(以上五級へ)

大島春海、高取武重、沼池豊三郎、

徳富光磨、魚住衛、(以上六級へ)

## 演説會記事

二月四日、例會を瑞邦館に開く、辨士及び演題左の如し。

スパート、ホーム

自覺とは何ぞや

刷新の時期

呪咀すべき客觀主義

社會主義を論ず

宇宙生活論

小川道之輔

齊藤惣一

新美龍丸

衛藤利夫

大川周明

海野得志

## 柔道部秋期大會

秋漸く老ひて龍南の天地霜白し空に講和の風吹  
吹いて世は再び平和の光を浴びんとす白川の水  
益清く竜山の紅葉愈紅なり過し三月の休暇に故  
山の花月を友として氣を養ひし幾多戰士の腕試  
しいさや龍南の丘の上に龍虎の勇を戦はさん時  
は來にけり今や新來幾多の英士を迎へて意氣益  
揚らんとするの時に當り十一月十二日を卜し松  
の緑のいと濃き濟美の館に相會し戸張師範審判  
の下に秋季大會紅白勝負を舉行せられぬ當日の  
出席者は校長部長を始めとし觀覽者場内に滿つ  
五十の戰士綺羅星の如く何れも顯場の盛事たり  
午後一時を過る頃相互の戰士先づ鋒を横へぬ雨  
となるか將た風となるか當日の勝負左の如し  
大三輪—平林田口 屈強なる大三輪は紅軍の先  
驅者たり凜々たる平林は白軍の先鋒たり衆目は  
悉く注かれぬ今や戦はひらかれぬ白紅の呼聲は  
静さを破りて響き渡りぬ渡り合ふ二三合大三輪  
先進み足拂に攻む平林受損んじてひるむ處を大

三輪得たりと組まんとし隙に乘して大三輪の十字紋に隣れ平林の首は撥れぬ續いて出でし小兵の田口能くふせき能くせめぬ組まんとし組ませじとする暫しもみ合に戦あぐんで遂に引分此間九分

近藤―池田有田 互角の新武士近藤の氣勝りけん初めより攻勢の大外刈敵のひるむを見猛進袈裟固は遂に功を奏しぬ有田は之を見て忌はしき敵の振舞あなと武者振付くをいらつて近藤が懸くる体落の功も遂に有田のために恢復せられぬ互に攻めつ桃みつ遂に充分の勝負も見へ分かず引別れて陣に退く

山根―勝田神谷 柔たる楊柳よく古松を仆す勝田は遂に敵の刀に仆れぬ首級一つ得し山根は勇氣日頃に百倍しいで白軍の勇士に見參せんと待構へたる時しもあれ靜かに出來りしは紅軍好漢神谷なり体こそ小さけれ技に於はよも劣らじいさや見參せんと互に桃む機に乘して敵の背負に

神谷の体あわやと見たる風車見事外れたれども續いて攻め來る十字紋に神谷はもろくも斃されぬ

渡邊―山根和田 敵の二級を得て勝ちほこりたる山根も渡邊が疾風の如き大外刈に仆され是はと續く和田の体は又も得意の外刈は倒れ徒らに渡邊の爲めに功を奪はれぬ

後藤―渡邊 小兵なれば小蔭に隠れて能も渡邊の術を見破りたる後藤の敏且妙譬は花に戯る小蝶の如く取ては還し還しては寄する折しも敵の背負の一刹那後藤が巧みにかわすくゝり絞高橋―後藤 應揚に出で來りし敵に小蝶の後藤も詮術なく敵より受くる大外刈に脆く仆れぬ野村―菊池 悠然と出來りしは意風堂々名にし負ふ土佐一流の業者野村なり忽ち用ゆる御箱の紋に菊池が首は靡れ落されぬ

久松―野村 天晴なる敵の武者振かな吾見參して雌雄の勝負を決せんとやたら起ち上りて敵陣

ちかく進みしは是紅軍の荒武者久松なり技はあるか術はあるか満目悉く勇士が様に注かれぬ電光石火久松の大腰はいたく野村の膽を塞からしめぬ是は叶はじと野村が御箱の組業も夫すら甲斐もなかりけりあなやと思ふ間もあらせず疾風の如く猛進し來る腰の早業に野村の体はいたく地上に叩き付けらるスワと續いて攻め來る栗林も久松が鋭き背負の大刀風にアツト後に付るれば余裕ならしと突込む村上またも久松か鋭き利劍に何の苦もなく首かゝれぬ數度の戦ふ打敗られし白軍は士氣衰へぬまたも出て來る大里は小兵なれど手は利いたり而も勝ほこりたる久松の腕に敵すべくもあらず終始守勢によく防ぎしも久松が最後の大外刈は遂に彼に名譽の最後を與へぬ敵五人を斬り取つて氣未だ衰へず猛然とつき起てば氣を吞まれてか白軍の戰士意氣上らず忽ち振ふ大外刈の早業川添の体は風車ひるむ助田も一瞬時久松が背負よく利いて助田はドソと

仆れて疊負ひぬ

南―久松 体の力に限りあり氣は未だ衰へたるにあらねとも數度の合戦に早や敵の首七級を得て身には既に十六筋の矢を負ひ劍は折れ矢は盡きて力全く疲れ果たる久松は早是までと有あわせたる席の上ドソカと坐せば虚を見て得たり突きたる白軍の戰士は誰ぞ小なれとも巧瘦せたれども慧呼吸もつかせず組でかゝれば久松も早や是までと身を投げて遂に南に首を捧げぬあわれ勇士の血汐に染し奮戦の跡何處ぞや通れ大和の櫻武士ちりてこそ色も香もあれ

野村―南 南は敵の勇士の首揆き切りて勇んで其處に扣ゆれば敵の戰士野村は出でぬ勢込たる巧慧の南一刻の猶豫もあらばこそ切つて懸れば野村は受けつ流しつ南焦らつても野村に七分の強みは見へたり悠々迫らざる野村の態度南が武者振付くを拂ひよけつゝ組み敷いて起さず横四方は立派なもの

田島―野村 暫時立ちすくんで攻めんとせす互に胸に畫策のありてか如何に忽ち振ふ田島の巴野村の体宙を飛んで彼方に落ちぬ

八木―田島三木 精悍屈強たる八木は兀凸として戰場に突立ぬ憐れ眞に是れ好個の好漢意氣衝天の慨あり首級片手に空しく立ちし田島も少しく當惑の色見わたたり突込む八木防く田島咄嗟咆哮体落は遂に田島の体を殺しぬ巧將三木は出でたり吼る八木の前には敵すべくもあらずされど三木も去るもの八木の大腰引摺かんで斬り付けんとせしも果さず氣衰へ精つきて空しく功名を八木に譲りしは修練の足らざる爲か可惜

久保田―八木 あまり劇しく戦ひて再度まで敵を斬りたる八木は久保田の意氣を恐れてか氣勢振はず八木の組業久保田の背負遂に久保田の大外刈返しに打たれぬる八木の躰は氣拔いたらし笠原―久保田除野 馬くつろげて立ちし久保田小癩なりと立遇ふ勇士見れば白哲美丈夫笠原

なり多年鍛ひし腕の試いさやと進みて喰つて掛れば久保田は名だる龍南の業士渡り合ふ事三四合イヨとの聲も夾かに久保田の躰は大地にひしど挫けぬ敵なから天晴の手なみ此勇士引捕へて物の見事に生擒んと驀然に進み出しは白軍の重鎮除野なり何れ劣らぬ業士と業士除野の大腰笠原の背負何れを夫とも分け兼ねる陽炎稻妻麻利子天打ちては迎へ攻めては守る互の秘訣虚々實々あわれ天晴武者振かなと敵も味方も籠扣いてとよめきぬ挑戦九分離合十數遂に勝を決せず馬を分ちて莞爾と笑ふ武者と武者

室田―清末 紅軍の業士室田磐石の如く萬夫も動かすべからざる清末の英姿彼は背負ひに是は足拂ひに互に持して相下らず七分の劇戰遂に勝負見へすして止みぬ

立石―北川 大兵の立石動くともなき大磐石氣鋭の北川技の施すべき處なかりしも立石の日頃の技能何處へ去りしか組む手もひるみ氣も揚ら

す空しく分つ残念さ日頃の修練の足らずとは是を見る人の僻目か

加瀬―川上 共に是福陵切つての業士なり花々し今日の見合の一綺打もみつもまれつ切りつさられつ川上得意の躰落加瀬の立派な背負振も今日は何故か飽氣なく秒と過ぎ分と經て遂に呼ばる引分の聲に應じて退く戰士と戰士豫想の大なりしに比し見る人の氣稍挫けぬ

笠原―大村 本場鍊の精銳士体あり技あり體に美髯の髯武者は悠然紅軍の陣頭に表れぬ立ちまこう龍南名代の擥猛子大村も氣遅れてか急に立たずやがて憤然と立ち上れば龍虎玉を爭ふ風となるか將た雨となるか徐ろに立つ髯竝小癢なりと突入る大村彼の高襟引摺んで早や首をかゝんあせれとも甲斐なしあせる大村いらつ笠原共に利劍の大腰も互ひの固め利きもせず早りに早る笠原は敵のひるむを倒れなからに取つて押へ袈裟の固めに早や首を揆かんとすれば名にし負ふ

寝業巧者の擥猛子滿身の力を込めてウンと返せど笠原の大の体は宙を廻りてやがて立ち上せぬ兩勇士戰の劇しかりし爲めか氣ゆるみしか大村はいさど突入る笠原の大腰の大刀風凄くあわや体は眞二ツ

大島―笠原 猛然として白軍の副將大島は表はれぬ大村との血戰にいたく疲れたる笠原は兎角力衰へて意氣揚らず大島が最後の足車に暗く斃れしは飽氣なかりし

平川―大島 猛將の首を奮ひし大島は軀幹技能共に兼ふ備へたる旭將軍平川あるを覺悟せり泰然進み來りし旭將軍應揚に見極すれば大島先づ小内刈に攻むをよとせざる大磐石切つて大島が利腕取つて押へ込まんとして果さず渡り合ふ三四合平川の足拂大島の小内刈何れも極まらず突入る平川の釣込是は充分の功を奏して打仆せしは見事

貝塚―平川 副將軍を失ひし白軍の士氣振はず

白軍を代表する重任を帯びてやたら馬を進めし御大將龍南の鬼將軍貝塚は徐ろに白軍の陣頭に出馬あり悠々迫らざる巍然たる大丈夫平川の勢込めし體落も何のきゝめもあらばこそ動かさる事山の如し忽ち一聲獅子の聲耳を破ふると見る間もあらせず貝塚の手は早や平川の帯にあり今や御得意の大腰はあはや平川の大軀を屠らんとせり刹那磐石の落る響は是れ平川の骸を横へたるなりき

貝塚―鈴木 豪敵の首級を高く揚げて悠然として立ち上れば紅軍の副將軍鈴木鞭聲高く敵の御大將天晴の剛敵いざ見參と驀然に切つて懸らんとはしつれとも敵は名にして負ふ白軍御大將無氣に不覺の敗を招きなば一軍不面目此上なく右手腰帯にあてゝ右を引き腰を低めて進みしはよく敵の長を察したりしか巧者の鈴木何をと貝塚まづ疊む腰車果さず奮戦格闘十數合流石の貝塚攻あぐみて見わしがさらばと進む貝塚は今や敵

を引摺み満身の血を以て一舉に首を撥かゝんとせしも鈴木強情よく之を防ぎぬ渡合三四合鈴木の慎重遂に貝塚の爲めに敗られず右を引たる巧者の業に貝塚得意も無念や此儘施さんに術なく引分の聲と共に再會の勝負を約して東西に別かれぬあわれ紅軍の好副將一軍の責を一身に着てよくも剛敵を喰ひ止めし事の健氣さよ紅軍の大將東野は戦はず見事月桂冠は紅軍の頭上に着されぬ時正に五時夕陽は斜に窓を射て金色の波は館を飾りぬ右終りて當日の優勝者に賞品を與るぬ第一の殊勲者久松氏は喝采場裡にメタル及び賞品を受取り午後五時を過る頃茶話會に遷る五十戰士茶菓に酔ひて快話に時を移し散會せしは六時を過る頃なり』

### 明治三十九年柔道部寒稽古

夜の幕は未だ開かずキラキラと光る星の姿寒く芝生の霜もいとう白し稽古衣蒙りて濟美館に走

り込む健兒が面影やがて聞ゆる喧々囂々暗を破りて廣野遙かに響き渡りぬ勇士が聲勇ましとまた勇まし例年の如く一月十七日より三週間毎朝五時より七時まで濟美館にて寒稽古を行ふ出席者九十余名中本年皆勤者四十名、三年皆勤者七名

## 三年皆勤者

河部 慶輔 久保田 晴光 渡邊 保

平井 文雄 間庭 秀夫 太田 作次郎

星野 貞次

## 本年皆勤者

鈴木 彌直 河部 慶輔 長瀬 定太郎

釜瀬 富太 久保田 晴光 笠原 隆輔

除野 康雄 天川 大三郎 古賀 熊喜

渡邊 保 平井 文雄 間庭 秀夫

八木 梨 野村 直美 菊池 英彦

太田 作次郎 林 哲夫 高橋 省三郎

志摩 次郎 三隅 庠 山根 義道

増田 胤次 安藤 畫一 増田 胤次

星野 貞次 吾妻 耕一 吉島 義助

神谷 甫彦 北川 正惇 大野 源五郎

大里 利八郎 鈴木 平十郎 鈴木 軍藏

池田 庄五郎 久保田 賢 大井 知光

古山 春四郎 松原 健吉 野津 清忠

事張 勇

## 本年昇級者

由中 誠吉

## 右二級甲へ

大島 春海 貝塚 正 鈴木 彌直

## 右二級乙へ

東野 太郎 長瀬 定太郎 平川 亮三郎

河部 慶輔

## 右三級甲へ

川上 市太郎 梶原 吉人

## 右三級乙へ

藤井 成美 除野 康雄 清未 三重

笠原 敬輔 久松 七藏 久保田 晴光

## 右四級甲へ

間庭 秀夫 古賀 熊喜 天川 大三郎

高橋 省三郎 平川 文雄

## 右四級乙へ

北川 心惇 山根 茂道 大野 源五郎  
 吾妻 粹一 大井 知光 菊池 英彦  
 太田 作次郎 星野 貞次

右五級甲、

鈴木 平十郎 志摩 次郎 池田 庄五郎

安藤 晝一

右五級乙、

右山 春四郎 松原 健吉 久保田 實

鈴木 軍藏 大里 利八郎 野津 清忠

右六級、

昇級ス

明治廿九年二月十日

委道部

## 龍山風騷錄

(對七高演武競技の顛末)

時歲末考試に迫りて人皆越難關の準備に忙かしき時、鹿兒島第七高等學校造士館の健兒は、雄壯激越なる文字を聯ねて吾人に挑んで曰く、今回避寒の休暇を利用し、來春早々兵を整へて貴校の庭に向はんとす野球庭球、擊劍柔道、各日

を定めて華々しく其の力を試み、以て三十九年の年頭を飾らんは如何にと。從來我校は校長閣下の方針として對校の競技運動を許されざれども、武夫の矢をひき番へて射る時に、返す心を知らざらんは吾人の耻づる所、楯綻びし衣川の敗將にさへやさしき節はあるものを、まして剛朴の大旗を龍南の野に樹て、柔弱浮華の時勢に驕る吾人、この書に接て豈に肉動き血躍るを覺わざらんや。人は屠蘇に酔うて平和の第一年を謳うべし、吾人には吾人の主張あり、ノートを閉ち鉄筆を拭ふて直ちに竈邊の老猫をまねぶは吾人の事にあらず。餅腹の痞に苦みつゝ、脂粉の香充滿せるはどりに、喋々喙々、長々し夜を爭はんは吾人の將に睡棄せんとする所、裂膚の風をも衝くべし、凍趾の雪をも踏むべし、鍛い上げし五尺の體この冬日を笑つて過さんに何事かあらん。竹刀一揮閃としてこの寒天に牙へなば、蘭身葦質の貴公子は震へもせん。剛球憂と



して棒端に飛ば、瓢鯰○○の灰殻は駭きもせん。時勢日に剛健尙武の風に遠ざかりて、青年に風を攔る力だに失せなんとす、快なる哉快なる哉この一舉彼等が迷夢の耳に一大獅子吼を傳へて、彼等が頭上より覺醒の冷水を注いで呉れんに。吾人は欣然として、五高の名を以てせず、龍南會の名を以てせず、たゞ斯道に努むる一個團體の名義を以て、七高生に答ふるに快諾の旨を以てせり。

而じて吾人をして更らに這回の事に就きて、快哉を叫ぶを禁する能はざらしめしものあり。龍南の地九州の中心に當り、吾人は由來鎮西に於ける運動界の霸權を握り、大小の諸校みな欣美嘆美の聲を捧ぐるのみにして、むしろ好敵手のこれなきを嘆きしに、去年四月、北方なる山口高等學校は、遠く海峽を渡りて吾人が壘を衝かんとし、吾人はこれを福陵に邀撃して殆んど復た起つ能はざらしめ、茲に霸權は愈々其の範圍

を擴張して、吾人が意氣さらに揚れる時、いままた薩南健兒の挑戰狀に接せしことこれなり。七高はこれ新興氣鋭の猛者、所は衣肝に至る兵兒の本場所に當り、距國百里此の地に來りて戦はんとす、其の勇また侮る可らず、而して其の期する所また察するに難からず。恰もこれ丁丑當年の南州が、太郎山を越へて銀城の干城將軍に相對せし故事を復びするもの、いま我れ主にして彼れ客たりと雖も、敗者は遂に勝者の前に膝を折らざる可らず、演武競技の目的素より此れにあらずして他にありと雖も、此の事未だ容易に看過せらるべきにあらず、あは誰れかまづ敵を殲して吳山の第一峰に其の馬を立てんものぞ吾等は直ちに準備にとりかざれり、試験の難關は其の進歩を害すること少なからざりしと雖も、滿校の學友諸氏が熱心なる援助は、まづ各部の選手を定め費用を募るに、多くの遺憾あらしめざりき。今各部選手の氏名を擧ぐれば、

## 野球

加藤 正一、三好 泉、和田 信夫。  
山田 説郎、福田 虎龜、大村 一藏、  
飯田 亮、八重野 秀夫、山本 清。

## 庭球

川田 小三郎、萩尾 博、松兼 盛次、  
馬場 寛六、長瀬 定太郎、川下 謙一、  
永富 一衛、奥村 安興、正村 慎三郎、  
船川 尤三、武富 三郎、宮川 之雄、  
土方 美澄、鳴海 秀雄、依田 稔、  
吉川 宏。

## 擊劍

福山 隆吉、鈴木 彌直、坂本 一平、  
足立 精一、小泉 勝喜、黒田 保吉、  
野中 松一、田島 丈雄、上田 清、  
久保 六郎、鍋倉 一、川田 小三郎、  
山崎 晃、山口 倫三、太淵 三樹。

## 柔道

田中 誠吉、大島 春海、鈴木 彌直、  
笠原 敬輔、長瀬 定太郎、東野 太郎、  
戸次勝右衛門、平川 亮三郎、阿部 慶輔、  
貝塚 正、除野 康雄、辻 敬止、  
川上 太郎、清未 三圭、黒田 保吉。

爾來十日より十六日に至るまで以上の選手は一

刻千金の時間を措まずして、専心稽古を勵めり。已にして第一學期の試験を迎へ、少時く湧躍の氣を章句の間に向けしが、二十四日全く終了を告ぐるや、委員選手は再び舊の戦闘準備に復せり。即ち新寮の一棟を學寮より借り受け選手は大抵これに起臥し、賄立山嘉平次をして殊に食卓に注意せしめ、以て糧不給の憾なからしめたり。これより夜々大火鉢を圍みて、某々の劍客が額を赭く染めながら、鬼の様な右の腕を叩いて、斬らう突かうの所作事は、知らぬ人には空屋を宿の切取強盜の群とも見らるべく、某々の柔道家が中學以來の功名話には、可愛い稚兒さんの一笑に、思はず稽古が身に入りし懺悔話も交るべく、いづれ久しい運動界の飛將たち、場敷重なれば武者振ひとやらは見わざれど、眉宇の間自から昂れる心の抑へ難きを示して、鉦鼓の聲今にも聞わなば直ちに打つて出でんと逸りて逸れば、四拾幾人を一團の明治の梁山泊、

○原某氏の花和尚魯智深、○村某氏の黒旋風李達、獯猛魁偉の數々を盡して、軍用の卵代をうまく利用する策士吳用先生や、朝から晩まで正座して慎直身を持する君子人及時雨宋公明に至るまで、數へて見れば適り役は、こゝにも事欠がざるめり。而して旦々暮々武夫原頭濟美館裡に、憂々の音阿云の聲絶へず、人は或は故郷に歸り或は旅行に出で、殆んど空虚なる校内も、一道の活氣は茫然として漲れり。然れども二十四日以来の天候は少しも定まらず、雨あらざれば風あり、爲めに戶外運動に屬する野球庭球の練習は、多大の障害を蒙り、殊に靜穩の日と雖も空曇り寒氣甚しく、斯くして歲華は刻々に縮まり行かんとす。

三十日午前七高の先發として特務委員尾越、擊劍部委員田崎、野球部委員田村の三氏來着し、豫て交渉したきたる丸小旅館に案内す。

三十一日午後六時頃七高委員選手及敎授菅野氏

柔道擊劍師範各一名を合して七十名許來着、同旅館及支店に投宿す。此の夜わが委員選手の淋しく寮に残れるもの二十名、新寮階上に茶菓を喫して忘年會を催す。此の間三十日柔道部委員大島氏練習中甚だしく腰を痛めて、癒ゆべくもあらざれば大村一藏氏補缺としてこれに代りなり、

明くれば明治三十九年一月一日、寒風浙瀝、灰色の空より今にも白きものゝ舞ひ落ちんかと疑はるれども、萬象こゝに新まりては、また何となく長閑き心地して、昨夜枕を並べて臥せし誰れ彼れ、今更互に御目出度う御若うの挨拶物々しきも、また愛嬌なり。

一月二日、午前十時兩校各部委員特別自習室に會して次の諸項を協定す。

#### 一、時 日

一、競技は一月四日を以て始む。但し野球庭球は各一日に劍柔道は一日中これを午前と午後とに分ち行ふ。二、庭球

コートに故障なき時は庭球を第一日に行ひ野球劍柔道これに次ぐ 三、コートに故障ある際は野球を先にしコート修理を待ちて庭球を行ひ劍柔道は餘日を以てこれを行ふ 四、第一日雨天なる時は劍術を行ひ柔道は野球試合終了後にす、

## 二、各部・細則、

### (イ) 劍術部

一、各選手十五名を出す 二、勝負は紅白三本勝負法による 三、會場は本校内濟美館とす 四、審判は兩校師範に請託す 五、時間は午前九時を以て始む、但し四日雨天にして柔道を延期する時は午後一時半よりとす。

### (ロ) 柔道部

一、各選手十五名を出す 二、勝負は武徳會規定の勝負法による但し勝負に關する細則は審判に一任す 三、會場は本校濟美館とす 四、審判は兩校師範に請託す 五、時間は午後一時を以て始む

### (ハ) 野球部

一、勝負法は兩校委員に於て協定す 二、會場は本校グラ

ウンドとす 三、審判は豊原氏に請託す 四、午前十二時より始む

### (ニ) 庭球部

一、各選手十六名を出す 二、勝負法は兩校委員に於て協定す 三、試合場は本校東側コートとす 四、審判は福岡醫科大學生木村小澄兩氏に請託す 五、時間は午前十時を以て始む

### 三、雜則

一、聲援は拍手の外凡てこれを禁ず 二、着袴せざるものは入場を許さず 三、場内の取締は双方の委員にて擔任す 四、審判招聘の費用は双方にて分擔す 五、オーターは各試合前一時間にて交換す 六、七高を冠軍とし五高を白軍とす

此の日も寒風蕭殺、五合灘に荒ぶる濤聲轟々、七高生は午后に來りて庭球及野球の練習をなしたり。擊劍柔道は武徳會場を借り受けて、練習怠りなかりしといふ。午後六時吾等は七高生を招きて歡迎會を濟美館に催す、小田總務まつ起ちて歡迎の辭を述べ、今回の事長く我等の交誼

を温め、共に尙武の爲め大に得るところなかる可らずと述べ、七高尾越特務の挨拶あり、終りて茶菓を喫しつゝ狂言を見、各選手は其の對手と同じ火鉢を圍みて、最も愉快に最も無邪氣に笑談し、互に明日戦場に相會せんことを約して散解せしは午后十時。あゝ晴れの勝負は明日に逼れり、此夜新寮階上人語低く、嚙枚の人馬竊かに中山悠閑の道を辿りて急ぐに似たり。

一月四日。霽來微雨あり朝に至りて止みしも今日の陰晴未だ、俄かに卜す可らず。且つ庭球コート濡りて故障甚しければ、協定條款に隨て午後一時半より擊劍の試合に決す。此の時すでに外來の參觀者麁至して、一向時の至るを待つあり、濟美館裡五高方を西方とし七高方を東方とし各其席に着き、來賓席には校長閣下さへ見られたり。流石に惜しき今日の吾等が晴業なりけむ。やがて兩校選手入場し互に一揖して坐に着き、辞わが兒島擊劍部長簡短なる開會の辭を述

べ、七高敎授菅野氏また一場の挨拶を済ませば、梅崎師範は南方の審判席に、七高師範小谷氏は北方の審判席に着かる。満場の静寂さらに聞として一秒二秒。山雨將に至らんとして風樓に滿つ、寂たる一場冷氣少しく搖ぐよと見れば先鋒野中と澤田とは相對して出でたるなり、この時この境たゞ夢心地にして胸奥かすかなる心臓の鼓動數へて恍たる一刹那、忽ち靜を破る、瓶破水迸の急音。あゝ太刀は合されたり、大活劇は始まれり、余はこゝに始まれる爾來三日間の大壯快事を寫すに、心徒らに逸りて筆のこれに伴はざるを耻づ、以下に續くる記事はたゞ全輻の一点畫のみ、何を描くといはんや。

澤田・野中。全軍士氣の興廢を双肩に擔つて出でたるわが野中は、體こそ小さけれ其の太刀先の鋭き殆んど端倪すべからざるものあり。太刀を合すや否やまづ上段に構へてじり／＼と詰め寄す。蒼隼に脱まれし鶴の如き澤田體は可なり

に大きけれど、はや七分の氣は野中に吞まれたり、紫電一閃忽ち澤田の籠手は切り落されぬ。されども澤田も七高の先鋒奮戦甚だ力めたれば手負ひながらも容易に首を渡さず、死物狂ひに打ち込んで來れば、こゝしばらくは目覺しき戦ひに、心も心ならず見てある程に、やかで響く野中の掛聲御籠手！、梅崎師範籠手參り相濟み！

久保田―野中 新たにいでたる久保田、六尺豊かの大體もて小男の野中が頭上より無二無三に打ち下せば、野中が受太刀を越へて續けさまに御面御面、

久保田―山口 わのれ失敬なと躍り出でしわが山口七高方にては太刀筋よほど確かなりと聞えし久保田が手元に切つて入れば、またもや御面一本してやられぬされども屈せぬ山口敵の滅多打ちに打ち込む太刀の下を飛鳥の如く潜りぬけて續けさまに籠手二本、

馬場―山口 敵と相對して一揮する瞬間に其の勇怯を見てとる劍道の極意、馬場が武者振りあまり揚がらざるを見て以下の木葉武者何條ことかあらんと勢に乗する山口經快なる體を躍らして打つてかゝれば馬場は極めて慎重の態度をとる、山口が隙を狙ふて籠手二本、あゝ早まつたと山口の後悔

馬場―鍋倉 敵一人を殲せば味方も一人をたをし、勝敗の勢未だ容易に定まらべくもあらず、濟美館裡數千の星眸は齊しく新たにいでたる鍋倉が上に注かれぬ。數にも足らぬ弱武者共をたはすに、何ほどの隙をつぶすべきかわと鍋倉が悠々として逼まらず屈強なる其の五体を場の中央に運ばせば、待ち構へたる馬場は直ちに鍋倉が眞顔深く切り付けぬ。あたらし此の勇士打たせてはと白軍の將士少しく色めきしが、かばかりの事に少しも動せぬ鍋倉、小癢なりと、敵の腦天真二つに打割り返す刀に籠手をも見事に斬り

落してけり。

木村―鍋倉 木村瘦ぎすの体を巧みに動かして

斬つてかゝれど、もとより鍋倉の敵にあらず、

始めの面一本は觀者にはかすり疵とも見えず、

鍋倉が面と籠手に見事一本宛。

竹内―鍋倉 竹内紅軍の形勢漸く悪しきにいら

だちて勢猛に斬り込めば鍋倉騒がず籠手一本ま

た一本。

毛利―鍋倉 いまや鍋倉が勢は天に冲せり續い

て出て来る毛利が横面一本したゝかに敲り付く

、毛利も一生懸命鍋倉が面一本を得しも、また

も打込む鍋倉が御胴に毛利が躰は眞二つ。

古橋―鍋倉 古橋勢鋭く鍋倉の眞額目がけて斬

つて入れば、すかさぬ鍋倉早くも先んじての古

の籠手一本。古橋再び面をとらんと立ち向へば

鍋倉面倒なりと受けたる太刀を返しに御籠手！

月岡―鍋倉 五名の敵屍を前に並べて勢少しも

減せざる鍋倉恐るゝ出て来る月岡の籠手を切

り落し、勵聲一番月岡の眞額唐竹割、よろめく  
月岡に異状なきかと危まれぬ。

紅軍(七高)

白軍(五高)

○澤 田

○野 中

○久保 田

○山 口

○馬 場

○○○○○鍋

倉

木 村

○大 淵

竹 内

山 崎

毛 利

川 田

古 橋

○○○久

保

月 岡

○上 田

○金 井

○田 島

○大 和 田

坂 本

○大 塚

黒 田

赤 峰

小 泉

廣 田

鈴 木

○大 和

福 山

○田 崎

足 立

金井―鍋倉 見苦しくも破るゝ味方の有様に無念の涙を揮ひつゝ虎髯逆立て、立ち現はれたる敵の謀將金井手負猪の如く突きかゝれば鍋倉騒がず金井が面した、かに斬り付く審判「モー少し」金井これに勢を得て盲打ちに鍋倉が籠手二本。鍋倉いまは數ヶ所の痛手に身も疲れ徐かに引き退く數ふれば敵はすでに八名を失ひ我は僅かに三名を傷ふのみ。

金井―大淵 待ちあぐみたる大淵は金井か心はやり眼くらみ手元しごろなるを見まづ籠手を打ち落し次で体當りに金井が後ろによろめくところを上より打ら下して籠手金井の苦心もあたら水泡に歸れ了んぬ。

大和田―大淵 無念の齒噛みキリ／＼と打ち込む大和田に大淵續けさまに面二本してやられぬ大和田―山崎 山崎つか／＼と敵の手本に付け入ると見るや電光一閃横に走つて大和田が胴の真中確かに。續いて突き込む太刀先に大和田見

事頸筋を貫かれて後ろに二三歩よろ／＼審判「モー一本拜見しましよ」山崎面倒臭しと敵の打ち込みを引きはづして胴腹深く切り込めは矢張り山崎の勝なりけり。

大塚―山崎 紅軍頼み切りの勇士大塚白面白胴すべて白づくしにはでを見てまづ山崎の籠手一本。山崎何かあらんと胴一本返報したれど少しく軽く遂にまた籠手一本とられたり。

大塚―川田 大勢已に定まれり區々の勝負何かあらんいまはたゞ敵のへろ／＼共に吾等が太刀の鋭さを歸國の土産話にせしむれば足るとて川田がふみ込みふみ込み暴虎馮河を衝けば却つて塚の爲めに利せられて籠手一本面一本してやられしは口惜しかりし事どもなりし

大塚―久保 久保が得意の上段にたへず。攻勢をとれば場馴れたる大塚もまづ胴腹深く切り付けられたれどこれもさるもの敵の勢たゞならずと見てとり、極めて慎重の態度にかへり絶間な



大多和―上田 上田まつ大刀振り上げて敵の籠  
手を狙ふと見ねしが大多和が御面の真中ホーン  
。 大多和怒りて上田が籠手を傷けしも上田が返  
す御胴の一撃に無念の齒を食ひ縛りて斃れけり  
田崎―上田 味方斯く暗々と打たるゝからは、

はや悔むとも詮なしと覺悟の体に徐々出で来る若大將田崎、まず上田が面に斬り込めば上田も、いらつて田崎が面を打ち割つたり。やがて勇ましく打込む上田が面と田崎が胴、いづれがそれと見分かさりしが審判聲あり胴が先！

田崎―田島 華々しき敵の若武者、引組んで首搔き切らん熊谷が番は我れなりと、手ぐすね引いて待つたる田島まづ田崎が面に一撃を見舞へば、田崎も劣らず田島が額に深く斬り込んだり。小やさしき公達とて侮りならずと田島思ひ切つて深く斬り付くれば田崎は頭を割られて敢なくなりにつけり。敵は大將以下十五名枕を並べて倒れたるに我れにはなほ坂本、黒田、小泉、鈴木、福山、足立の六將未だ刃に廻らずして控ねたり、演武の第一日は斯の如くして空前の大勝を得たる也。時に午后三時、全体に於て僅かに一時間を費したるのみ。折から細雨蕭々として降り、遺骸を載せて退く七高軍の爲めに悲愁の

趣を添ゆるものあるに似たり。これより新寮の一室に茶を啜りて選手諸氏の功名話、敵と一太刀も合せぬを憾む手合は「何故君達はチツト御愛嬌にでも敗けてやらぬ」と無理な注文するに「チニ随分景物を付けて置いたわい あれ丈け拜見されば充分だ」と答ふる意味は余等にはチツとも分らず。

一月五日明くれば天氣快晴、一点の雲翳なく、始めて新春の光に浴することを得たり、この朝柔道部選手貝塚君叔父君の計報ありたりとて、突然高瀬に去る、若しや然るべき策もやあらんと。鈴木君車を飛ばして池田驛に其の跡を追ひしも、瀛車は已に發せし後なりしかば藤井成美君これに代り。午前野球午後柔道と定めたり。

(野球、柔道、テニスの仕合は記事幅湊に付遺憾ながら次號に譲る)

## 第十五回自炊記念會

二月十五日、吾等の自炊記念會も十五回と重なつた。言ふを休めよ剛朴の風は廢せりと。龍山泉こゝ秀麗の地に吾等が團欒のまごゐを造つてから十五年幾多社會の急潮緩潮の裡に立ちて、少しも蕩撃浸飾の勢に犯さるゝことなく。進取の概向上の氣以て天下青年の爲めに、進行の鼓を打つてゐるのた、唯一この美しい自炊制度に待つてゐるのである。實に二月十五日は毎年最も楽しい日である、炊事委員長が鍛うのを我慢してゐるのも、たゞこの日あるからで。八時に起きて十分間で洋服を着顔を洗ひ、朝飯を抜きにして四時間の間、腹の虫を泣かせて、先生から馬鹿！と怒鳴られて反抗の勇氣も出ない雜報子も、今朝ばかりは起早して食堂の小豆飯を食ひに行つた。赤い旗青い旗。滑稽畫作り物風刺画。これは年々其の數が減じて行く様に見ゐるのは。舍監の檢閲といふ恐ろしい御法度の爲であるか何うか、入り口に貼つてあつた寮中雜感

## 百三十八

とやらの内に『○○○を神經過敏と診斷し』などあつたのは、まさか其んな意味ではあるまい。午後の二時から南寮北寮の野球試合と綱引があつて共に南寮の勝になつたさうだが、雜報子は見る暇が無かつた。それから角力がある。やつぱ、犖犖さんてろが、一番強かつたごたつた。夕飯になる、折詰を二つ宛、大事相に抱へて食堂を出て来る、大男小男、美少年非美少年みな今日ばかりは、にこ／＼顔であつた。詩吟、筑紫琵琶、随分乱調に唸りつゝみな濟美館とさして行く。雜報子は後れ馳せに行つたから。すでに寮歌の合唱といふところであつた。東京に頼んだ譜がとう／＼間に合なぬとかで。誰か、御手製の節で、あまり面白からず、やがて所謂革命兒連の新作北寮の歌に壓倒せられてしまつたのは残念であつた。狂言は例により例の如く、むしろ無くもがなで。炊事委員連の催假裝行列はあまり早く引き込んで、しまつたれば。眼に留

るいとまなし、但し真先に提灯振り翳し進んだる、二十世絶王猛先生の自炊紀念萬歳のざら聲には余も思はず相和して萬歳を彌次つて見た。二部生の黒奴の婚禮中々面白かつたれど、不得要領。活人画の本能寺、正行、曾我兄弟等は上出来。戸張柔道師範の劍舞は勇壯との評判。三幕續きの二部生の『詩人殺』役者は滅法に可かりしかど誤摩化しらしい所多く、其の目録の『第二幕於茶屋捕縛の場』は流石にサインユスの頭には苦心の句と見わたり。雜報子も退屈して十時引き上ぐ、これから後の薩摩琵琶は面白かりし由。歸途甘酒ホールに一杯聞こしめし、さきの折詰を開き、少し干からびになつた酢や蒲鉾やを無暗に詰め込んだ爲か、終夜腹痛で苦んだが。夜のストームが案外に氣勢なかりしにて助かりしかど。総じて今日の記念會は淋しい様な氣持がしてならなかつた。まさか戦後だから遠慮するといふのでもあるまいよ。

(一) それ北韓の白雪に

朔北風は寒くして

屍つみしは何故ぞ。

(二)

正義と道を窓として

新勝の榮にまびくれて

よろこびくるふ時ならし。

(三)

扶搖をうちてかけのほろ

陸背の氣はまろへて

意氣いつこそや。

(四)

あく薩摩湯月清く

正氣をこゝに表はして

きつかれしより十六年。

(五)

天風雲を拂ひては

噴煙空をつくこゝろく

上りてやまぬ我がわが。

(六)

渾身の血を湧かしめて

我力ある双肩に

龍南の健兒今ぞたて。

(七)

今武夫原の春にして

覺醒の歌高誦せば

さはのびやきにさよむ哉。

血潮をめしは何故ぞ

白草原の月すく

潤眼を世にそくすや

甘き夢路をくりかへし

圖南の翼をさまれば

痛しい哉神州の青年の

波に沈みし丈夫が

巍々たる姿三察の

蘇山曙光に漲りて

塵雲低く雲高く

誰頼勢に抗すへき

荷ふつこめは重かるを

鬱勃の氣をばらすべく

天窓遠くこたまして

# 委員改選

二月十七日龍南會各部委員を改選す當選者左の如し

○總務

栗野昇太郎、平井文雄

○演說部

釜瀬富太、保々隆矣

○雜誌部

松村武雄、太川周明、

深川繁治、柏木純一、

○擊劍部

緒方大象

○柔術部

上田清、黑田保吉

○弓術部

貝塚正、平川亮三郎

○運動部

波江梯夫、川浪澤人

○端艇部

大村一藏、萩尾博  
小田秀吉、浦川精一、  
鷺淵信雄、志摩二郎

# 對七高演武競技費用決算報告

收入

一金八十七圓六拾九錢也

支出

一金四拾七圓也

一金參圓也

一金四圓八拾錢也

一金拾六圓六拾錢也

一金四圓也

一金四拾錢也

一金貳拾錢也

一金貳拾錢也

一金五錢也

一金拾四圓四拾四錢也

差引過不足ナシ

生徒寄附金

牛豚肉代

賄立山へ謝禮

浴場用薪炭代

歡迎費

卵代

車代

紙代

電報料

墨代

選手慰勞會費

# 寄贈雜誌書目

獅子ヶ城 十二、

無盡燈 壹、二

無我の愛 十六、

佐渡中學同窓會

無盡燈社

無我苑

會 誌	八、	大阪府八尾中學校
教育時論	七四、五、六、	開 發 社
校友會雜誌	七、八、九、	
一橋會雜誌	十七、十八、	麻布中學校々友會
學友會雜誌	六、	東京高等商業學校
白 鷺	十一、	兵庫縣立柏原中學校
國家學會雜誌	二十卷一、	八代中學校學友會
校友會雜誌	十三、	國 家 學 會
矯々會雜誌	八九、	豐津中學校校友會
家庭新聞	七〇、七一、七二、	中學明善校矯々會
研瑤會雜誌	六九、	長崎醫學專門學校
六合雜誌		ゆにてりあん教會
華 陽		岐阜中學校
校友會雜誌		第一高等學校
城 北	四六、	東京府立第四中學校
嶽水會雜誌	三二、	第三高等學校嶽水會

# ○龍南會宛年賀狀 を給はりし人々

岩松孝子。川田鐵彌。熊谷彌兵衛。松原恒二。大井治久。

江口俊博。池田秀雄。今村勝。大塚惟精。松井小三郎。  
西浩。花田大五郎。行徳俊則。猪股勲。井岡忠雄。  
高島彌三。丸山篤。末松階一郎。黒田孫一。後藤文夫。  
古川久米。惠利武。別府三穂三郎。戸次正。田原純一。  
小林一男。古澤保藏。山崎達之輔。菊屋族緒。南條壽。  
田澤義輔。倉原良夫

## 第十五回紀念運動會費決算書

### 收入ノ部

一金四拾八圓五錢七厘	前年ヨリ繰越
一金五拾圓	龍南會補助
一金百六圓	本校生徒寄付
一金五拾四圓五十錢	細川家、黒髮村役場 其他本校出入商人寄付
合計金貳百五拾八圓五拾五錢七厘	

### 支出ノ部

一金四圓	式場裝飾費
一金五圓	煙火費
一金貳拾圓	運動用具費
一金五拾圓	賞品費

一金參拾圓

一金六拾五圓

一金拾圓

一金八圓

一金九圓五十貳錢

合計金貳百壹圓五拾貳錢

差引金五十七圓三錢七厘

賞品交付所及特別庶費

來賓及生徒弁當費

委員慰勞會費

樂隊謝金

雜費

殘額

但翌年エ繰越

## 師範生駒先生の易簣

弓術部師範生駒新太郎先生、昨歲十二月三日溘然として永眠せらる。

先生逝き給ふ時、年八十二。

先生吾校龍南會弓術部の師範たること八年、其指導の下に、武を練り神を磨くの徒、既に幾百なるを知らず、天命元より如何にもすべからざるは明かなりと雖、今にして先生を失ふ、吾人の悲愁何を以て之を譬へんや。先生は常に鎮西唯一の名手たりし而已ならず、今日此古武技を

## 百四十二

傳ふるの士として、實に全國有數の大家たりき、昨歲大日本武徳會武術の大名手として、範士の稱號を授けられし者、弓術界に於て全國僅に二人、而して先生實に其内の一人たりし也、此榮譽ある老先生を戴ける吾校弓術部は、亦實に多大の誇を斯界に有したりし也。

先生は古武士の典型なりき、其後嚴なる壯烈なる、然も優美なる溫雅なる、之に接しては常に一味の清氣除に來るを覺たりき、先生八十の老軀を運んで、里余の遠きを遠しとせず、稽古日毎に射場に臨み、門下を指導し愛撫し給へる、其意氣其心事、眞に壯者也及ばざる處なりき、あゝ然れども先生今や亡し。

冬の日射場の小庭に、若き門下がかき集めたる心盡しの枯松葉を、溫かき圍爐の火として、靜かに道を説ける老先生の昔憶はるゝよ、安土を圍りて立つ焚火の烟遽、端座して教を語る白髮の古武士ぞ慕はるゝよ、先生が崇拜せる英傑は

義家なりき、衣川に一聲を口吟みて、弦引收めたる心こそ誠に弓矢の道なれと云ひ給ひき、あはれ今更の如く耳底に残れる先生の教は何ぞ、「弓は氣を以て射る也、矢の神を戴せて飛ぶ也、矢竹を以て黒鐵の兜を貫くは力にあらず勢也、然れども弓矢は形のみ、人の射るべき的は見ぬ的也」と。

あゝ、射場の小松は今に緑變へねども、遂に吾人は、そこに老先生の教を聞く能はざる也、古武士の面影を仰ぐ能はざる也、悲哉、痛哉。

### 噫鳥越貞治君

(潮香謹記)

由來人性の恨事一にして止まらず、されど學未だ成らず、業猶は遂げず、春青燃ゆる身は、あへなくも鬱勃たる大志と共に一片の烟と消へ、孤憤一壘僅かに其跡を留むるのみ、訪ふはたゞ秋風、照らすはたゞ秋月、百代遂に超たざるは、苟も血あり涙ある者の同情を値して餘あり。

あゝ我友鳥越貞治君、明治三十九年一月十七日、世は猶、戰勝の新年に浮かれたる時、靈界の光明をたどりて、須磨病院に逝きぬ。

君は筑後の人明治三十六年九月本校一部に入るや蛟龍雲雨を得るの概あり、拮据勉勵、將來多望の士として、衆の屬目する所なりき。不幸にして翌年七月、二豎に襲はれ、遂に休學するの止むを得ざるに至る。病を養ふ茲に一年有半、天か命か、朔風凜々愁雲溟々たるの晨、二十二年の短夢は、須磨の浦の烟と消へて、遂に復た見るべくもあらず。あゝ落花に情なく、流水に心なしと、逝く者は皆斯の如きか、噫。

君や資性英敏、不羈の意、俊雋の才を抱き、加ふるに氣節ありき。夙に智見を修養し、信念を陶冶するに移め、末世悽季の歎は、君をして慈善的事業を自己の天職と信せしむるに至りぬ。平素山岡鐵州翁の最后を羨慕し、治に居て乱を忘れず、生にありて死に處するの道は、深く君



が胆銘せる所なりき。病改まりて、終焉既に近きにあらんとする時、父君は授くるに、世尊身后的大慈悲、久遠實成の無上道を以てしぬ。あゝこれ、八万十二の教義、一代五時の説法にも勝りつらんか、君は病床に喝破して曰く、「あゝ眞に愉快」と、父母阿兄に訣別する三度、逍遙として世を去りきど。あゝ何ぞ其臨終の壯美にして、しかも悲愴なるや。

君と余、親交茲に多年、恰も骨肉の如し、君の訃音に接するや、心腸斷たるゝが如きの思をなし、泣涕轉た禁する能はざる也。回顧すれば、春醢にして花開く故郷の地、握手して須臾の別離を惜みたるは、昨の如きも既に一歳を経たり、年少氣銳の英姿、髣髴として眼底に存すれども、あゝこれ永訣なりしか。あゝ雪の晨、月の夕、共に杖を曳き船を浮べし、なづかしの我故郷の山や水や、昔ながらに聳へ、今なほ流るれども、君や遂に逝きてまた還らず、三春の行樂

誰れと共に語らん。生を思ふて涙、死を思ふて涙、斗石なほ多しとせざる也。あゝ昔者伯牙琴を絶ち、孔子醢を覆はすとかや、余や六道流轉の凡夫のみ、悵悵綿々として、長へに盡きざる也。されど翻て思ふ、逝ける君の高潔なる慈善的遺言、壯美なる獅子吼の臨終は、既に色心相應の信者となり、如說修行の行者となれるを示す、傳へ曰ふ、須梨盤特は三歲僅かに十四を記して、尙ほ佛となり、提婆達多は六万藏を諳じて、無間に墮つと、安住の一念を離れては、天下の智識畢竟何するものぞ、あゝ壽と天とは君に於て何かあらん。徒らに涕流前后を忘るゝは、我また亡友の望に非ざるべきを信ずる也。我性や痴鈍、鞭撻猶及ばずと雖も、時に僥倖によりて、君が素志の萬一をも果すを得ば、これ亡友の靈に對する、せめてもの供養なるべきを思ふ。今宵、月暗く風寒し、箕峰の麓筑水の邊、地下に眠れる君を懷いては、哀悼煩悶留む

べくもあらず血涙墨に和してこれを記す、豈に  
俯仰今昔の感に堪はんや、噫。(天風生)

### 布田基男君を悼む

春氣肌に寒くして蒼蠅未だ暖を負うて飛ばず密  
雲濛々、風颯颯たるの時一部三年生布田基男君  
の訃に接す、痛ましい哉。

君は上益城郡鯉村の人、明治三十六年を以て五  
高に入り、爾來孜々として學に勵むこと三年、  
本月十日突如として急性胃腸病に罹られ呻吟三  
日、遂に十二日午后九時、滿腔の雄志を抱いて、  
泊然、白玉樓中の人となられぬ。若草未だ春光  
に浴せず空しく摧折す、惜綿々たり。况んや君  
の母堂齡暨に耳順、皓髮鬢々嶢然として齒亦墮  
ちなんとす、今や、世界に有する唯一の男の子  
なる君を喪うて慟哭苦悶の情、惻々として直に  
人の肺腑を衝く。あゝ人の世何ぞ、しかし一に  
缺陷の大なる。

進歩的生活、これ榮ある君が短生涯を謳ふ恰當  
の讃辭に非ずや、君は決して英氣颯爽の人に非  
ず、亦才華煥發の人に非ざりき。天馬空を行き  
、俊鷹波に翔る底の行動は決して君に見るを得  
ざりき、君は夫れ、淵底に偃蹇するかの老松の  
如き乎。君は堅忍の代表者也、持久の説明者也  
。歩一歩、緩やかに、しかも確實に、斷々乎と  
して眞理の 世界に侵入し眞摯謹嚴、漸を以て  
、理想の境に近かんとするは君の本領なりし也  
、君が近時に於ける學識の進歩は所謂世の才子  
をして、走り且つ僵れしむるものありき、而し  
て天は、この有爲の士を奪ふ、何慘なるの甚し  
き、しかも、ワットソ卿言はずや、「他人をして已  
の有爲の士たるを悟らしむるは既にこの世に勝  
利を博せるなり」と君の如きはよくこの言にか  
なふもの、君夫れ安んじて瞑せよ、(松村生)

